

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

日曜日の午後はたいいてい、在宅患者さんの往診の時間に当てています。夕闇の訪れとともに、もう20年以上ごこのお宅で診察しながら『笑点』を見ていることになりました。昭和・平成・令和になっても変わらず大喜利の笑い。この番組がある限り、日本は平和でいられるんじゃないかと思ってみたり。

だげど今週(9日放送回)は、婆ちゃんも爺ちゃんも泣き笑いでした。追悼大喜利の特別回。林家たい平さんが、「円楽とアクリル越しのグータッチ。いつかアクリル板がなくなったらグータッチしようね」と言っていた。その円楽師匠がいなくなってしまうと……と言葉を詰まらせたときには思わずもらい泣きをしてしまいました。

落語家の六代目三遊亭円楽さんが、9月30日に亡くなりました。

276 六代目三遊亭円楽



円楽さんは、2018年に定期健診の際に肺がんが見つかりました。ステージ2〜3Aの診断で、ダビンチという内視鏡手術で切除。術後1週間で退院し、翌日に

は3つの高座に上がったというから驚きです。その後、化学療法を行い、元気に仕事を続けられていました。が、翌年、言葉が出なくなると、脳に腫瘍が発覚。肺からの転移性という診断だったそうです。がん患者さんのうち、およそ1割弱の人が、脳に転移をします。中でも、日本人は肺腺がんから脳に転移する人が最も多いことがわかっています。EGFRという非小細胞がんの表面に出現する遺伝子変異が、血流に乗って脳に行

き、がん細胞を増殖させてしまうのです。脳に転移するとめまいや吐き気、むくみ、意欲低下などの症状が現れます。

円楽さんは1カ月入院をし、ガンナイフという放射線治療を受けました。術後は外出許可をもらいすぐに高座に上がります。手術前と違い、「湯水のごとく言葉が出てくる」ことに、またまた落語ができる喜びをかみしめていたようです。

現役の希望貫く生き方に座布団百枚

「辞めちまおうと思ったね。俺がこの落語家は楽屋にいくらでもいる。でも、みっともなくていいから、死ぬまでやります。」これが円楽さんのリビングクワイール。死ぬまで現役の希望を貫いた生き方に、座布団百枚です。

この時、リンパ節にも2つの転移が認められ、こちらはキイトルーダという新しい免疫療法で、がんを小さくしました。逃げることなく、最新の治療を探しながら、仕事を続けられた円楽さん。今年1月には脳梗塞で入院しましたが、不死鳥のごとくこの8月には高座に復帰されました。

「死ぬまでやります。」これが円楽さんのリビングクワイール。死ぬまで現役の希望を貫いた生き方に、座布団百枚です。